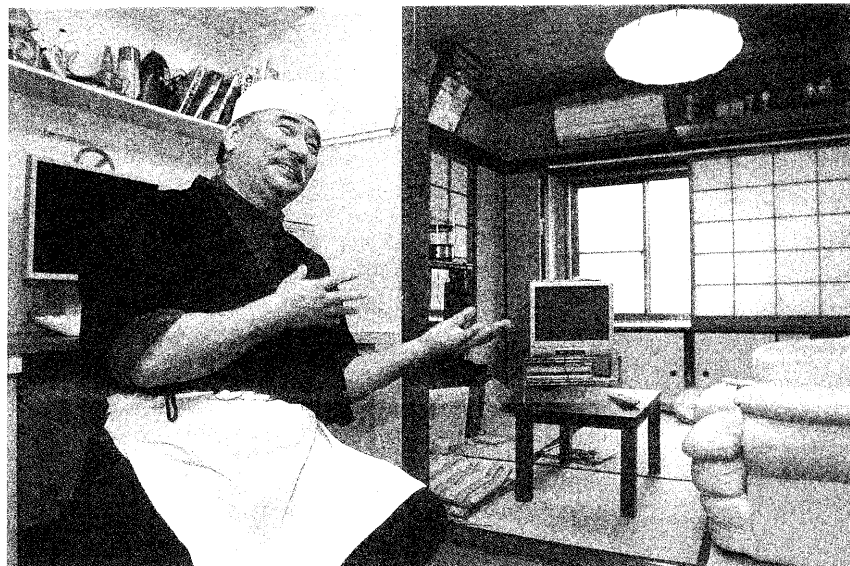


地元で元気に老いる

持ち家でミニ老人ホーム



そば屋を営みながらゲストハウスも運営し、近所の持ち家を老人ホームとして提供している鈴木さん（16日、墨田区で）＝中司雅信撮影

人生に、より大きな意味を持つ事態の先駆けに過ぎないことになり、やがて気づかされる。自身の50代を前にして、高齢の父と母が重い疾患に侵されてしまう。こうなると、父も母も老人ホームを頼る以外に、選択の余地がないことを思い知らされる。死んでいくまで、受け身で生きることを求められる。

父母をホームへ送っていく道々、何度もつぶやいたという。「明日は我が身」と。鈴木さんは言う。「東京の街は、年寄りには冷たすぎる。老人が片隅に追いやられていくのがいまの風景。大手を振って偉そうにしているのが当然なのに。欧米の街角には、老人が元気にたむろっている。それが当たり前のはず」

それでは、この東京で、高齢者がもっと自由に生きることは可能だろうか。

鈴木さんが提唱するのはミニ老人ホームのアイデア。鈴木さんには、はじめ、父親と母親のついでに住み家として建てた家がある。ところが、親たちには住みきれないといわかってくる。

その時点から街へ向かって、その家を開くことを考える。

つまり、老人ホームとして活用し、できれば地域の高齢者たちに任んでもらいたい。街へ向かって開かれた老人ホームである。2月に開設した老人ホームの管理運営は、NPO法人に委ねられる。

鈴木さんの言う「街の大家さん」が生まれていけば、地域の人の手で、高齢者の自由を束縛するのではなく、温かく見守る体制が生まれるのを期待できる。

（ノンフィクション作家）

ネギトロ天せいり 980円。日本そばの寿々喜屋（墨田区石原）では、これが、一品ものの最高値。せいたくの極致。

店の2階と3階にある、下宿スタイルのゲストハウスの住人たちはめいめい、月に一度、部屋代持参でやってくる。

すると、店主で、大家の鈴木隆司さん(52)は、店の品を各自一品ずつ振る舞うことになっている。

当初こそ遠慮して、安めの

たぬきそばあたりで盛りあげた連中も、慣れるにつれ、たまらず、リッチなネギトロの直線に。「あいっらあー！」と、生まれ育ちが下町の鈴木さん、けっこう口は悪い。

6年前、ゲストハウスのオープン当初は、欧米からのバックパッカーも目立ち、華やかな雰囲気だったが、まもなく一変した。

枝川公一の東京ストーリー

しかしこれは、自分自身の